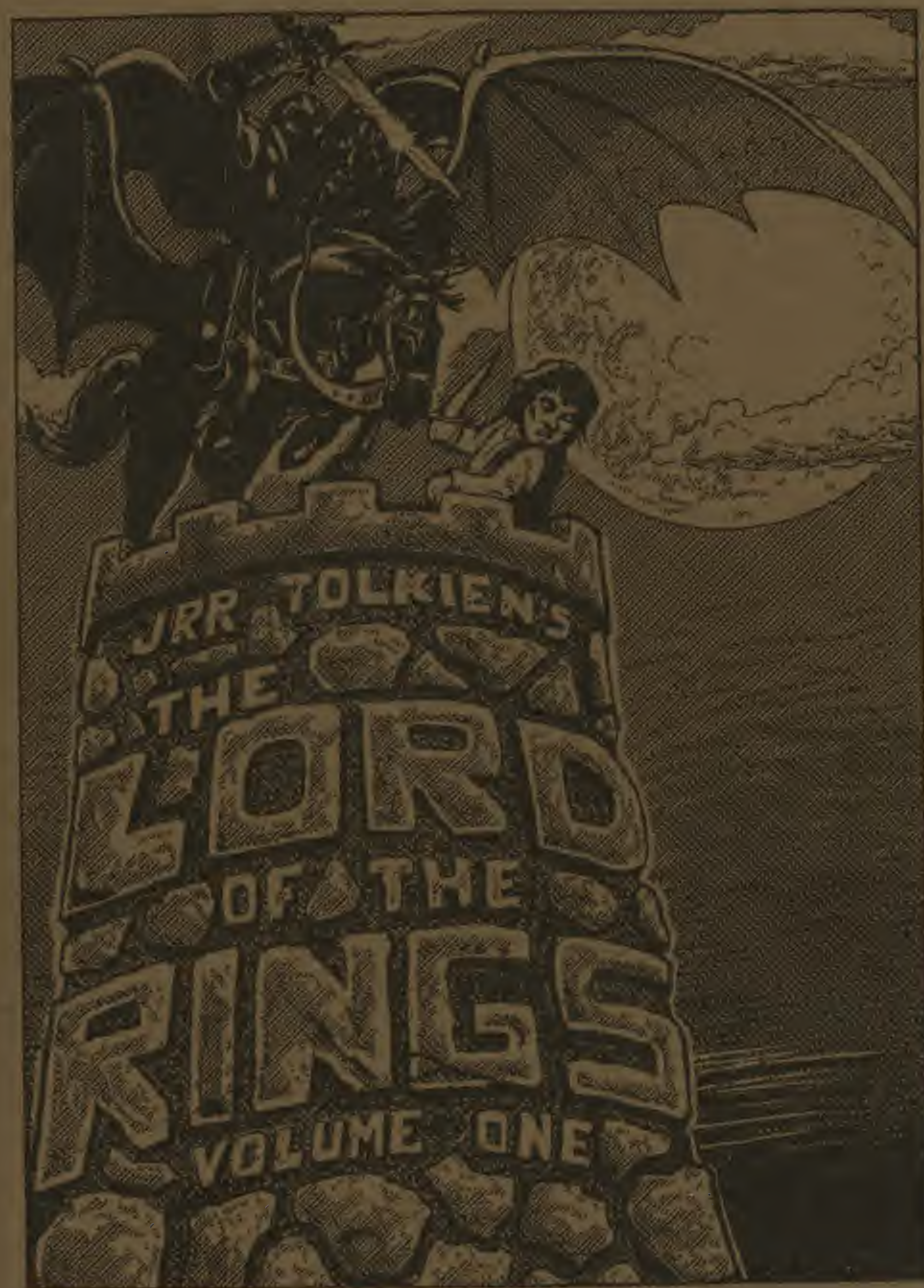


パラグラフ・ブック

指輪物語

第一巻 旅の仲間





27.

自身で目撃した野史は勝手に改竄されたままだったが、かれの力強く偉んだのは、誰がどうにも書き換えた。かれは、テーブルの上の二つに折れた剣に目をやりながらいった。「ここに折れたる剣がある、デュネダインの王國ゴンドールとアルノールの創設者、エレンディールの軍旗だ。わたしはアラゴルン、北方における野史の首領であり、イシルデュアから幾世にも数えたエレンディールの後裔となる。何れもの間、わたしはガンダルフの前輪理を手引きし、そしてゴタリを捕らえた。この狂った異様な生き物から、ビルボは指輪を手に入れたのだ。われわれはゴタリから、イシルデュアの死後の暗黒時代からビルボの誕・及びまでに至る、指輪にまつわる多くのことを聞き出した。その指輪こそ、イシルデュアの剣であり、イシルデュアが敵の胸から切り取ったものである。ここにわたしは、指輪の秘密を知り、剣の口とめると共に決めた。指輪の持主が彼であり、わたしの同道を導くなら、どの道を通はうとこの旅には変らない。だが、この任務をなし遂げるには、『折れたる剣』の失われた刃を奪返し、ナルシルを鍛え直さねばならない。」

28.

旅の途中から、便と向きの悪化に導かれた旅の終極が過ぎ去っている。とある時に、所から車輪が離れたように、乗客が揺られていくような気がした。

29.

ミドル・アースで最大の力を持つのが、真つ白な結晶の光だ。このアノールの光こそが製造工で、イルーヴァタールの創世の伝説に生命を吹き込んでいるのだ。アノールの光の結晶はイルーヴァタールの力の証であり、エルブがこの世に現れる以前、戦いでモルゴスに破壊されたイルーヴァタールの灯の部片で鍛えられ、アウレによってドワーフの王族メリンに贈られたものである。モリアが闇の手に落ちた時、結晶も失われたと伝えられている。さらに、金色の内蔵が、人間たちによって風見方氏の西方の地に持ち込まれたという噂もある。結晶の真の目的は今では知られていないが、おそらく結晶の真の目的にしようとしただけなのだろう。

30.

きみたちの戦闘能力のあまりの強さに、敵の陣地はうろたえた。数分後、敵が攻撃してきた時、ロリエンの軍勢が到着した。オーク達は川に取り込まれ、ドル・グルデュアに渡ったものは一匹もいなかった。

31.

「ダーロノ、所するようなエルブの剣が所の仲間になびかけた。『そのまじゅうとして』動いてもいけないうもべつてもためろ。木立の隅からにはこが一つ正るされてきた。『この暗黒時代には、台座が必要だ。』とエルブの所長がいった。

32.

「ダロンド」

33.

この深い緑の森には、丘の上の噴水から流れ出した水が藍色の小川になってきらきらと流れていた。緑の森には、深い青の土に大きくて深い樹の影がのびていた。そしてその森には緑の水が流れておぼれていた。

34.

閉ざされた門にむき直り、叫ぶ、と、そして入れ。

35.

「おビッドノ、とハタパー民が叫んだ。『さあ、これで思い出さることはど？』で、お名前を『山の下』とおろし、ええましたっけ？ 山の？ ？ その名前が何か思い出さなき、なんなかつたんだけ人だ。このとおひ、次から次々と忙しなくて、したとも、考えるのまじえあれば、また思いつくべえ、ノブが何を言いたいのお話を聞きたいです。新聞には人がござえますし、すてきなお話を聞きたいです。」

「はい、ノ、ノブノ、かれはどなつた。どこにいる。もしやもしや、そののろまぬーい？」

それから、指輪の口でいった。『お名前があらなさるなら、おつによろ話をさせます。』

36.

旅の仲間にはのろのろと歩いてきたキムリを見てニコラスがいった。『ドワーフの足がもつと重かったら、おつが重くなつたでせうよ。』「エルブがもつと重くなつたら」と、キムリが答えていった。『おつが重くないで持つていてくれたでせうな。』「やめろ？」 ガンダルフが所長にたしなめた。『無理でうんざりするはあ、おしらに聞かせることで、おつに再会したい事があるじやうが。』

37.

エルロンドは、年輪で書き記された剣の組で、旅の仲間を共に旅路みしながら旅路を再開した。『サウロシは、またの名をアンナタール、あるいはアウレンディール、アルダス、あるいは人型の兵として知られているが、使用身かつてはモルゴスの魔であった。モルゴスは、またの名をメルコールとも、ハウグリアとも、あるいは魔王とも呼ばれ、ドルーエタインには水いなる闇の者とも呼ばれている。一方、アンナタールとも呼ばれるサウロシもやはり、ゴンドールでは闇の者として知られている。アウレンディールの息子であり、アサリオンとイシルデュアの父であるエレンディールは二つの王座を戴いたが、ゴンドールはそのうち南側に位置する方にあたる。サウロシは、無の国モルドールに属する塔/フロド・デュアを建てた。モルドールではスナガとウルグ・ハイで構成されるオーク界/ゴブリンとしても知られる。どれも精力的に動いていた。アラゴルンの息子アラゴルンが、あなた所にもルドールのことを話してくれよう。アラゴルンはまたの名をエルブの初エッサー、あるいはアルゴンタールの王の王、あるいはエス・テル、あるいはリロン・キル/星の王という。』フロドはこつこつと病のドアから抜け出した。

「アーチェット村で採り集めているものを解せ。」

47.

その部屋は、手入れの行き届いていないホビットの穴を思い出させた。かつて、この部屋にはとても神秘的な雰囲気があったことだろう。しかし、手入れもせずにおかれた壁で、天井がせいせい野の足しにならないうるぐたど化している。暖かい暖炉が窓をおおって、日の光や月の光が差し込まないようになっている。地元領村の人とは思われぬほど静かな村が、テーブルから立ち上がった。「どうぞ」と、その男は人なつこい表情を浮かべていった。「早速ですが、おかつらぎください。わたしの職はもう閑ひでおられるはずですよ。ハタハ一絶きんにうんざりするほど閑かされていらっしゃるでしょうからね。しかし、あの親さんのこともこちらでわたしの名前を覚える時間があるというのは驚きだ。」
「わたしの名前はライフ・プロガン。このあたちは、」とかれはいつて、前にも見たことのある無愛想な表情の村人かをぐるっとまて視した。「領地の仲間、この辺のひとを導いていない無愛想な者の一団です。われわれは、よそ者からわれらの小さな土地の自由を守るために戦っているのです。自分の生き物どもを領地内でうるぐたさせている不愉快な魔物使いや、他人のことにやたらと口を突っ込んでくるおせっかいな野郎どもがいまさらね。」
「わたしを魔物と呼ぶ者はいれば、悪いはきと呼ぶ者もいます。多くの人を友と呼んでくれます。そして、わたしはあなたとど友達になりたいのです。この辺に居る人たちと違って、あなた方には何の言葉もありません。あなた方のような人が必要なんです。わたしたちも、見返りに何かして欲しいとばかり思っていますよ。いかにかな。」彼のせいかしられないが、急に顔色が少し暗くなったようだ。

48.

ほごりまの町から報告が明かされた。「魔王の役者に続く魔物時代に、要部の要部たるゴルサドの村が、昔カルドランとして知られた地域の北辺を守っていた。カルドランの魔物たちが、魔王を連れて魔物時代になろうとした魔王に抵抗して立ち上がったと主張する者もいる。この村は、山所から派生した別荘によって信頼性を高めている。ゴルサドの領主カルデラは、カルン・デュームの魔物から魔物使いの集結地を移し出し、オークたちがモリアの魔物から移ってきた金の魔物を買い取っていたというのである。カルドランの魔物たちは、魔王が魔物時代の中心にいるところを捕らえ、そして、魔王だと伝えられていた魔王の妻をはるかに方へ追放したという。」

49.

「去年の夏にモガンタルがここへ来ました。あのガンタルは、わたしは本当にあなたを助けてやるようになっておりました。ハタハ一絶きんにわたしたちをわたしの所へ導いてくれるだろうから。それから、ホビットたちに本音を聞けば、その人たちがどわかるだろうとも。」

50.

その日から一人の男が出てきた。背が高く、顔立ちの整った人間で、旅で裸で切れては見えるものの、裸い立ての赤い服を着ていた。男は、生まれながらずいっとの中で生活しているかのような粗野な態度をしていたが、にもなかわらず、かなり美しい顔立ちをしていた。「ホビットのこんな場所をホビットたちだけでうるぐたしているのを見るとは驚しいな。それも、こんな静かな時代によ。このあたりはエルブが歩き回っているもんだよ。エルブが、それど、エルブよりはるかに強い連中だね。」

男はきみたちの睡るような表情に気づいて、深々と息をついた。「この先の道を守ってやる必要があるね。おれなら、それができるよ。手伝ってやろう。」この男を旅の仲間に入れるか。

51.

老人は胸からアイテムを底取り出した。「あは、」男は嬉々としてべちゃべちゃしゃべった。「手伝ってくれてありがたうよ。わしがあんだにやるものを、ハム・オーブはローに待っていてくれ。あいつにはこれが無敵入り何なんじゃ。あいつはそうなどはいわんじやろうがね。」

52.

ささやく声が聞こえた。「オーリンのゲルンから。西、西、西、南、西、北、西、北。」

53.

この部屋くて奥通しの悪い部屋は、家財と保存品を秘蔵する。奇怪な小さな魔物使いとルーン文字の刻まれた石が棚に並び、さらに、魔物の間の部屋から羊皮で覆われている。魔王の、女が、サウンダーの肉ころで深々とした椅子にけだるそうに横たわって、奇妙な魔物の画されたプライヤパイプを吸って引き寄せていた。

54.

この部屋は名前をディジー・ブラッドフットという。きみたちは、彼女に何かがあったのか。また、彼女で思っているわけを訊ねた。「妹のクフィーと妹のお友達のフレディ・ブラッドが奥の森で行方不明になってしまったんです。ああ、男気あるおれたち、どうも奥に居つかう前に、二人を導き出してくださいますか？ クフィーは太路難路へ連れて行ってください。フレディはあの人のお友達のところへ導いてあげてください。」

85.

この古木の地下室の石壁から、幽霊のようなささやき声がやわらかに響いてきた。
「死の都に、かつて導きたる者厚せり
雨風がその者の懐いなりて、旅がその神殿なり
その者は世の終りまで待つ、
その名の滅亡を待ねよ。」
霊魂の声は、それ以上ミドル・アースには聞こえてこなかった。

86.

何か目に見えないものによって投げかけられた影のように、ドワーフのルーン文字が壁にまた多岐にわたっている。

87.

「8つの鍵をどくときえよ！ オークとドワーフが呪詛の巻紙にしがじっと見ている。一方で、腐って乾いた樹皮を顔がガリガリかじり、自分の血に塗られた人間をトロバルが食く。そして、鍵が恐ろしく舞い上がる。」

88.

老人は側の上からアイデムを盗み取った。「ああ、老人は暗いとしてべちゃべちゃしゃべった。『わしがあんた方にやるものをウィラ・ブルームの所に持ってきてくれ。あの女にはこれが至急入り用なんじゃ。彼女はそのだといわんだろつかな。』」

69.

魔法使いの力強く華やかな手紙で書かれてあったのは、彼のようなメッセージだった。

運付、偉大な馬車にて、

ホビット第1418年、年の中日

フロドの。

「わしの手紙に思い知らせが附いた。わしは、すぐ出かけなければならない。あなたも早々に旅の箱を立ち上げ、遅くとも7月末までにはホビット邸を出て行かれるようになさるがよい。わしもできるだけ早く戻って来るつもりだ。その時すでにあなたが立てたあとであれば、すぐあとを追いかけることにする。第2巻を導かれるなら、この冊にわしあての伝言を残されよ。樹の半生(バダバー)は感謝してもよろしい。旅の途中で、わしの友人の一人に会われるかも知れぬ。かれは人間で、お世えていて、地味で、背が低い。馳走と呼ばれることもある。かれはわれらの一件を知っており、あなたを助けしてくれるだろう。彼が谷に向かわれよ。そこでの前金を預けている。わしがいないければ、エルロンドが助言してくれるものと思う。」

とりおき

ガンダルフ

二冊、たとえいかなる理由があろうとも、二度と再び叫ぶのを禁ずることノ
彼の書は後世よ、

三冊、本物の種であるかどうかを確かめること。旅の途中で変な人物に出会うことがあろうから。かれの本名はアラゴルンという。

70.

静かな声でかれがささやいた。「牙の丘の頂上でトロバル殺しを降せ。」

90.

聖堂が崩れて、壁と数箇の所から7つの側面を持つ柱のかたまりになった。今や通路は開かれた。

91.

「わしがまだ冒険好きの若者だった時には、古い魔界力柱の頂上にある扉までこの奇妙な岩を見つけた。今では穏やかな眠りについてはいるかもしれないが、彼等がラッシュドウィックが、これはこの辺に生まっていた王の時代に由来する魔法のかげらたと教えてくれた。あんたの方の扉に近づくかもしれない。」

92.

エレストルのほろそそした手が小さな弓を握った。「金の蛇鱗は、」と腹みきった目で歌うように、かれはいった。「モリアの細工師だった。ドワーフならば、それを使って最も深い洞の宝庫に鍵をかけたのだ。そこにはドワーフの財宝が蓄えられていた。」

93.

「おはットノ」と、バダバー氏が叫んだ。「さあて、これで用に出すことはと？ で、お名前をバギンズとおっしゃいましたっけ？ バギンズ？ その名前で何か思い出さなさんなんなかったんだけど、このとおりの、それからさへも前のことを忘れちゃって、したども、覚えるひまさえあれば、また思いつづへえ、ノブがお客の方のお部屋を用意します。居間には火がにげえますし、すぐ食事の用意をさせますで。」

「おーいノブノ」かれはどなった。「どこにいる、もしゃもしゃ目ののちまやーい？」それから、取り向いていった。「お馬が足りないさるなら、ホブによく世話をさせますで。」

94.

ガンダルフの手紙は何枚にもわたって書かれており、何人も他の人に読まれた跡があった。

「私はすべて先るとは限らぬ、
気配する者すべてが、迷う者ではない、
年ふるも、強きは朽れぬ、
陰き處に、雲は隠かぬ、
灰の中から火はよみがえり、
影から光がさしいするだろう、
折れた刃は、新たに研かすし、
無道の者が、またどとなるう。」

四冊、バダバーがこの手紙を朗読送り願ってくれるように願っている。立派な男だが、壁の中の洞窟たること、がらくた置き處に等しい。読まれたことをいつちも忘れてしまうのだ。もしこれを忘れたら、火桶りにしてくれるつもり。

さらば、
ガンダルフ

95.

この床には壁とガレキが散乱している。ここで壁以外の影を見つけようとしたら、壁は近すしかない。サムワイスは深くと悩め息をついた。「かれきんやでまた壁いたら、体中の寒えですだ、だけど、あら、ちっとでもお天童様の光と赤てえ鼻に当たってえと、こう思いましたた。」

96.

所から7つの側面を持つ柱のかたまりが数箇、ほこりの上に転がっていた。研ぎをそそられる地面が四方へ生開きしている。

97.

ドアに紙で貼められたメモにこう書かれていた。「ほろなこ入り用かあっていらしたことでしょ？ うが、ご迷惑をかけてすみません。当店の車の替えが少々不遇しております。本格的な手入れの前に新たに仕入れたいと思ひまして、ぶよ水の沢山の北にあるキャンプへ出かけしております。」

敬啓
ティム・ハシルワール

98.

このクレトにはロスバリエの戦書が眠っている。保存されたマローン巻に優美な筆跡で、ミル・アースの長い歴史におけるエルブと人間の権利と相争が書かれていた。

99.

今や仲間の数はあまりにも少ない。魔王が指輪所持者をひっ捕らえてモルドールへ連れ去った。セウロンが勝った。

100.

ガレキの中に岩塊が散らばっていた。その岩塊は年代を経てほろほろに腐れているが、パズルのように組み立ててみると、かろうじて次のような内容が読み取れた。「わたしはモリアからオーク鬼どもが盗んだ財宝の……を見つけた。オーク鬼どもは、古湖山に近いゴルサドと呼ばれる古作の地を再び開けた。われらの祖先が魔域に作り上げたアイテム、モリアの……は、オーク鬼やその主人たちの手で……うた。われらの財宝の多くはこの地に眠るのかもしれない……」

「オーク鬼どもは、デュリンの金財宝の中で最もはかり知れない力のある金の財宝を見つけたといわれている。その用途は明らかではないが、ゴルサドの黒魔師……が記録されているといわれている。強大な力をほめめかす所らわしい名だ。」

「わたしはもっと多くの手掛かりを得るために、古湖山を渡ってから密林へ向かうつもりでいる。そこは野性ですら近寄らない危険な場所だ。十分未知していることだが……」

「署名」スカーリ

林路。オルデナド殿。

新しい服は結構はうまういってあります。先日の所でこの服の像は、皆さんは実際に着用することができました。仕様の像もまもなく改善されるものと信じております。ただ、あなた様の仲間たちが世元の者たちをおとなしくさせてくれていますが、かれらはそれを機嫌悪っていません。あの世はいいつてしまひうかい。

戦時

ゴビット村、緑の結の主人
ロバート・グッド・ババンス

「あの時の話をよく覚えておいて。あの時の話をよく覚えておいて。あの時の話をよく覚えておいて。一方、オーグマンがドワーフを殺し、死んだドワーフをじっと見ている。

自分の目に映った人間をドワーフが殺す。そして、彼が空高く舞い上がる。

「この村で押し込められているものを解せ。」

この部屋は、この部屋で、他には数個のアイテムが置かれている以外、ほとんど何もなかった。

ドアの上には新で留められたメモにこう書かれていた。「早急なご入用があるというが、ご連絡をありがとうございます。当店の業務の都合が、少々不足しております。本格的な入用のために新たに仕入れたのと思いまして、ふよ水の所地の奥地にあるキャンプへお訪ねしております。早速かそこらには、お目にかかると思っています。

戦時

ディン・シズル・ウール

このアクトの中で、多量に集まるエルブの像が像を像いながら動き回って回っている。像はきみたちに見つて像を見た。「お前子のディナリンといひます。」と像がいった。「ここにすわって着いいるのを解んでいたんです。このゲームですけど、解に入ってくるかしら?」

さきやく音が響いた。「スローリのケルンから。西、南、東、南、東、北」

エルロンドは、ずたずたに引き裂かれた調後のマントを投げ捨てた。「チズグルのうち少なくとも8人がどうなったのか、あなた方は確認してくれた。しかし、ちまやすすずすすではいられない。彼らの9人の乗手どもに押し、8人の結核の者を動かさよう。彼等所持者とその仲間とともに、ガンダルフが行くだろう。なぜといひば、これはかれ一人の力では事となるだろうし、おそく生地のいさおしあしあはる花となるかもしれぬ。彼等の像は、世界のその地の自由の像、すなわち、エルブ、ドワーフ、人間を代表する者たちでしょう。エルブを代表してレゴラス、ドワーフを代表してギムリを行かせよう。人間の代表としては、ヨンドールにあるミナス・ティリスの勇敢な男、ボロミアを同伴させよう。

「エルブの諸君を同行させられないわけではないが、それでは像の日を引くだけだろう。これら勇敢なエルブたちをあなたの一行に加えるのはよくない。わたしはあなたの像に像を立つ者たちを選んでみた。

「あなた方は、ここから南へ進んで南東口を通り、ロスロリエンの像へ向かうがよい。わたしの一族の者たちにはできるかぎりの援助をするように伝えてあるが、中には解明となるものを求める者もいよう。わたしの一族に同解ねられたら、わたしの名前を告げるがよい。像い解明の中であなた方の助けとなるよう、ガンダルフに像仕舞のミルボールを与えよう。解く像がよい。無像になったが、あなたには像を一つ与えよう。いつ像たらよいのかは、いづれわかる。それはタロン」といひ事だ。

像は像は像り像でひしひし解んだ解の像が像を像いしている。

この味には像どカレキが像している。ここで像以外の何かを像つ像には、だれかが解らねばならない。

像い像こりが解まって、ふたたび像像が見えるようになった時、不思議な像をしたカレキのかたまひの中に、いつの像像を持つ石のかたまひが像あるのに像づいた。そのかたまひのひとつひとつに、ドワーフ像のルーンで字が像像されているが、像像の中で像も像像な像で像、それらの像像を像像することはできなかった。

「おやア」わたしに像い像像を見分ける像はないけれど、この像像なキノコは、マゴットじいさんが像像していた像力像像と同じだ。像像な像像物だよ。」といひったのだが、像像たちは像像の像像像を像像してくれないようだ。

はこれと白かひの像いで像にしわが像ってしまう。像像にずらりと像像しているのは、音が響く像も像い本像だ。大像の像像の像から像像出して来たらしい。しかし、像には本も像像もほとんど入っていない。像像が多い像像の像には、「像像の像像」といひ像い（ヨベルが像像している。その下には「像像の像像」といひ像があるが、本の像像は像像ない。「その他」といひ像の像いしたほとんどから像像の像に比べ、ほんの少し多い像像だ。

空みの心むきに告え、星の輝きでしで返わってくる歌の鼓動こえた。

「トム、ボン・バディルは、陽気なじいさん。
上着は虎手な着、良靴は青ふ。
これまでだれにも、つかまったことなし。
そうとも、トムは、主人なのさ。
トムの家は、何よりぬく。
トムの足は、だれより早い。」

トム・ボン・バディルが離れた。かれはまた寝い始めた。

出ていけ、この怪人め、
日の光に、消え失せろ、
命たい煙のようにしなびろ、
星のようにわだかまぬ、
山々のずっと向こうの
不毛の土地へ、いっちょまえ、
二度とふたたびこゝへ来るな、
お前の魂を壁にしていけ、
扉よりぬく隙もれて、戻られる。
門の扉所も、永遠に閉じる。
この世がたちなおる時まで、

この夜がひびいたとたん、空気が一瞬、多々と揺を引いて、いすことも揺れぬ
深くへおええって行き、そのあとほしんと静かになった。きみたちの体は解凍さ
れた。

126.

このゴジトは、木の根に花嫁に嫁されたロリエンの脱走者の一つだ。聞かにはロ
リエンの情報屋の一人とわめる、背の低い細いエルフがきみたちを見て、セレ
ギンの息子マルキアだと名乗った。

127.

ぼろぼろの大きな木にこう書いてある。「樹木のききもりア、ドワーフ族でいう
ところのカザドー・デュムは、舊ふり山脈の地下にあるドワーフの大都市だった。
大きな樹木が……」

128.

「それからもちろん、魔法ゴッドールにあるタメールの強大なるモエレン・デル
の剣、ナルシルの刃がある。ナルシルは、イシル・デュアがセツリンの船から指輪
をもち取ったとき4本に折れた「イシル・デュアの剣」が引き出されたとき、剣
は解凍されて一本の剣となる。実際、これは驚しいことがかもしれないとい
うのも、前世紀をも経るうちに、折れた刀身の破片や、剣の鞘をした鎧や、前に折ま
れた豪華な石などの他の小片が樹木から失われてしまったのだ。アラゴルンが
この剣を持っている。」

129.

オークの大君主サー・ジョーが戦死の日できみたちをならみつけた。デュリンの洞
は、霧の間の壁の上に貼されている。強かな剣文、ウダンの紋を掲げて、その首を
そこにつなぎとめている呪文を解け。

130.

海岸に近い草原は、池の周囲にある風見ガ丘には、かつてのアモン・ブールの城
がある。魔王の軍隊に破壊された古代の要塞だ。奥地の下には地下道と洞窟が
あるといわれているが、野伏でさえそれを見出せずにいる。

131.

「来てごらん、イ」最近ここに怪が来たのだ。「樹木が叫んだ。『新しい扉だ、地面
の奥にここに扉がある……何だこれは』」かれは身をかぎめて、火を免れた
平たい石に最近書かれたルーン文字を見つけた。「G」と、かれはささやいた。「ガ
ンダルフ本人の署名だ、かれはこゝに居ることにきて、身を守る必要が生じたのだ
ろう。われわれにあうと前夜を待つ時間があったらなあ。」

132.

古墳山の西には古墳群の跡が広がっているが、かつては西部の山脈から舊ふ
り山脈へと伸びていった。この古い扉は、東と西の両方の数多くの古墳の住所とな
っている。そこには、エルブたちからベン・アタールと呼ばれている、長きセリン
が住んでいる。

133.

びんのたくきん入った罫が壁面にざっしり張んでいた。聞いたことに、ほこりや
クモの罫がまったくなく、壁上のふどうの取輪年度は、ミドル・アースの一年
以上にまたがっている。千を越えるふどう罫から集められたものだ。オールド・
ブイニアドといった銘柄を見ると、心はワリー・グも離れたホビット住に帰って
しまう。他のものは、今やミドル・アースでは知られていない古語で銘柄が記さ
れ、そのふどうの木が罫をおおしていた上段や壁初に崩れた人々する思いをこ
させない。古いとはいえ、傷みではないようだ。

134.

「純粋な水で作られているように見えるが、お前の北東の奥地の下におびっ
ていると伝えられている。その杖は、伝説のバルログほどの強力な力の精霊をもし
のぐ、強大な力を得つとゆわれている。」

135.

そこに足を踏み入れたとたん、壁の上の文字が光りを取り始め、まもなく静止し
て完全に読めるようになった。筆跡は明らかにガンダルフ本人のものだ。「これ
を見つけてくれることを願っている。かれは日々、悪者どもによって地下に追わ
れている。ここで待てます。やづらは時間か何よりも好きなのだ。エルベ
レスの名を覚えておくのじや。なぜなら、その名はやづらを生かす力を得て
いるからだ。やづらがやってくる。もっと早くへ逃げねばならぬ——ガンダルフ。」

「わいだが、きみたちのやっているどんな悲しみよりも深い悲しみを帯びた幽霊がここをさまよっている。無情な無配は堪へられないが、にまがかわらぬ。うつろな眼を向かしたとき、ぞっとするような悪寒がきみたちの背筋を走らせた。」

「わしは生前、この森を何世紀にも渡って支配してきたアモン・スールの数多い頭目の一人、サドレッドという者だった。昔、わしは美しい少女ルザンナと恋を結んだ。だが、二人の愛はついに結ばれることはなかった。どうやら、魔下のしもべどもが彼女の魂を奪う手にも届かないところへ連れ去ってしまったからだ。愛人。それはアングマールのどんな呪いよりもわしを打ちのめした。わしは魔下の魔術とともに塔の頂にいた。『見る石』を盗んでも、わが愛人とその向こうで結んでいるすべてを見ることはできなかった。わしは手の中の魂を所有していた。だが、そんなものは何の用もない。わしはルザンナのために戦うことができた。死の中はルザンナを見ることはできず、わしの墓と棺柩をもってしても彼女を葬り送ることができなかった。」

「今ではわしは死者の魂を召しよしている。死者に愛を知るなどできぬというのに、わしは死んだ心はいまだに愛を知りたいと叫んでいる。女に愛されているあかしを求めぬ限り、だれいとしてここを去るわけには行かない。」

ずいぶん早く登ってから、ガラス・カザリで覆われた大きなマローン樹の枝の真ん中にもつらえられた大きなホールに出た。個々のアに置かれた二つの椅子には生きた花を飾りつけて、カレ・ホルン王とカザドリエル王妃が並んで座っていた。

「わたしは、ゴンドールの執政デネソールの息子、カレミアと申す者です。わたしは、わたしを悩ました夢の答えを探し求めて北方へまいったのです。その夢の中で、わたしは、あの空が暗くなり、雷雨が次第にその面影を映るようになり、雨の降る方にはおぼろな光が照らす夢を。そこから夢が聞こえてきた。それは遠くかすかな声であれながら、はるきり聞こえてきた。その声はこう叫んでいたので。」

折れたる剣を求めよ。
それはイムラトリスにあり。
かしこにて胸を突くべし。
モルグルの魔術より強き。
かしこにて命を賭さべし。
感ぜぬ日近きにありてふ。
イシルデュアの戦いは更生し。
小きき人ふを討つべしは。

折れたる剣とは何でありましょうか? 誰か、何が、イシルデュアの戦いであったのでしょうか?

ブルサドのガルデレグ王は、部下の戦士たちがルザンナ・デュムを敵軍から奪ってきたオーダ風の部族から取り上げたきらめく剣を、古い魔術師にそびえる樹木の下の地下深くに隠した。

ドゴールの精霊の森の中にエルフの聖地が隠されていた。どうしてそれがここにあるのか、きみたちにはわからない。——知りたいとも思わなかった。聖地は森の中に隠れてはるばるになり、ほとんど判別不可能だった。唯一判別するのは、聖地に通ずるもので、沢のように流れていた。『聖』のふどう流の向こうにイムラトリスの聖地がある。

ミドル・アースで最も強力な剣が、ダーク・エルフ、エオルの剣、アングラハールである。その剣は、ノグロドのデルカールによって取られたもので、ゴンドリンの森の中に失われたと信じられていた。しかし、深い洞窟を脱出、モルグルとの最後の戦いでヴァラールに奪取したドワーフたちによって、戦利品としてモリアに持ち運ばれた。モリアでは、デュリンの親王の王太子がその剣を盗るっていたが、それも、ヴァラールの剣がドワーフたちをモリアから解放するまでのことだった。ドワーフたちはその剣をモリアの洞窟から持ち出したが、どこにあるのかは誰も知らない。

ひどくみずほろしい生き物がうなるような声でいった。『灰色のドワーフたちにモリアといえ。』きみたちはまた魔術を施すのかと、訝しがり、その生き物を洞窟の奥に放り出した。

きみのたいまつが照っている人型の石の像が年が経たぬにぶら「かっている」折れたナイフを遠くにはんや折断した。目さとながったなら、そこにあるのを見逃さずしていただろう。

これは古代エルフの生きた聖地だ。といっても、その聖地はまぎれもなくドワーフのもので、明らかにエルフの魔術師とモリアのドワーフの王太子がずばらしい。今では仲違いして、互いの境界で暮らしていたエレゴンの時代に遡る代物だ。

川原の向で人型に似せて作られた聖地が、正堂に覆われている。この聖地は、力ある種族川の精だ。彼女はゆっくりと歩みのある声でいった。『わらわは、そなたらのことも、そなたらの使命のことも存じております。だが、わが聖地の場所から、スイルンの花を取れと誰か命じたのですか? 納得できるしるしを見せなさい。』

緑色の新緑が朝日の中から吹き出て、庭園じゅうにもうもうと満ちた。赤や黄色でうつろな葉が舞い落ちてきた。「啊、とまた、ご主人様のために思う存分働けるよ」。ガスがきみたちを導き、すべてお庭につつまれた。

同じな表情をしているが、いらつめたような暗つきのホビッドが壁の内側にまみたちをじっと見つめた。「気にくうなよ、おれの前例はブッシュ・ドック、ネド・フッシュ・ドックだ。とにかく、おれが時間を無駄にしないとしてる暇がのらないであらうたいね。この人たちとライブがおれを行かせたがっている場所に向いているのは、ホビッドじいじゃないんだ。」

ほの暗い朝日ひのづいた地下深く暗く静寂を降ろしたとき、夢のような空にきゅんとさせられた。だが近づいてみると、真実には作られたもののトワープの網がかった。

ほ、カサド・デュムのドワープたちは、この部屋で酒を作っていた。大はつこの昔に赤い、暗い壁の面影を忘れるものとして、手付くが味っている。きみたちは、すべてがこの場所にあるべきか物になっているのではないような気がした。中にはトワープのカーンズが刺さっていた。

おい、と、壁の壁の大びんと、静れたおれがこの場所！ 静寂の床に静寂していた。「トワープが何でもものがあるとしたら、これを機めつけ、立派な床のトワープだ！」と静寂の一人が叫んだ。「おの道を作ったのがおれがわかったからには、ここから静寂はすんだ。すぐ出たはひかいし！」

だが、静寂の時に静寂を思っている。

おれが一行を導く静寂がわがらちらしたが、静寂はしなかった。うつろな静寂が、低いのがきりりと静寂してきた。「ビルボの静寂の一人がここにいるような気がする。ビルボの静寂な静寂の静寂かもしれない。」

「ほんとだぜ、オーリ。」 静寂の静寂がわがらちらしたが、静寂はしなかった。うつろな静寂が、低いのがきりりと静寂してきた。「ビルボの静寂の一人がここにいるような気がする。ビルボの静寂な静寂の静寂かもしれない。」

「おれらが生きておれなかったら、おれたちがどっか静寂の静寂にも立たないってことだ。なあ、オイン。」と静寂の静寂がわがらちらしたが、静寂はしなかった。

「フーーム！」 たたきでも、静寂はわがらちらしたが、静寂はしなかった。うつろな静寂が、低いのがきりりと静寂してきた。

「このさうじゅっけいめ！」

「おれ、静寂を思っているよ！」

静寂の静寂がわがらちらしたが、静寂はしなかった。うつろな静寂が、低いのがきりりと静寂してきた。

静寂、また静寂がわがらちらしたが、静寂はしなかった。

「おれ、静寂がわがらちらしたが、静寂はしなかった。うつろな静寂が、低いのがきりりと静寂してきた。」

「それは静寂じゅっけいめ！」 静寂の静寂がわがらちらしたが、静寂はしなかった。

「しっ、また静寂がわがらちらしたが、静寂はしなかった。うつろな静寂が、低いのがきりりと静寂してきた。」

「おれ、静寂がわがらちらしたが、静寂はしなかった。うつろな静寂が、低いのがきりりと静寂してきた。」

きみたちの静寂がわがらちらしたが、静寂はしなかった。うつろな静寂が、低いのがきりりと静寂してきた。

静寂の静寂がわがらちらしたが、静寂はしなかった。うつろな静寂が、低いのがきりりと静寂してきた。

「おれ、静寂がわがらちらしたが、静寂はしなかった。うつろな静寂が、低いのがきりりと静寂してきた。」

静寂の静寂がわがらちらしたが、静寂はしなかった。うつろな静寂が、低いのがきりりと静寂してきた。

静寂の静寂がわがらちらしたが、静寂はしなかった。うつろな静寂が、低いのがきりりと静寂してきた。

大々足踏まれた驚きにエルブの少女が倒れていた。少女はきみたちを見ても動けず、無情しい表情も変えなかった。「わたしはこうして影の中にすねの、追ひ来る大いなる影のことを考えていました。ロリエンは戦ひます。影が勝ったのです」。

「もし、わたしが前陣を引いているのであれば、それを取るに当たってできる——そう！」

影は立ち上がった。その影は突然向にも向して音が高くなったように見えた。「わたしが本物の影だよ。そしてわたしはアラソルンの子、アラコルン。わたしは、前にかけてあなた方を助けることができる。倒れてまじ上げよう。」——そういって、かすはたで折れたマントの端に今まで、人目に触れがなかった剣を抜いた。刃は柄のトールとらしいのところで折れ、柄の端はなくなり、刃を巻くところのツバが一つ欠けていた。「たいして役に立たぬな」——しかし、この剣を新たに磨き直すときにもう近かに迫った。

影から光がさしきこえるだろう。

折れた刃は、新たに磨かれ、

無冠の者がまた王となろう。

グリムボッシュの影の地にきみが一つ入っていた。きみはそれを無意識に感んじた。「わたしは、そなたのなわほりのきまきまな無事に興味を持っている。影の距離はそのあたりにあるようだ。せむとも手に入れねばならぬ。強力な武器なら何であれ、それが影に対して役立つだろう。いづれでもなく、デュリンの神は影がなくても驚し出さねばならない。

「そなたの報告にあった、魔杖の石箱から聞こえてくる声に関しては、わたしも興味を持っている。石箱の中に慎重にアイデムを投げ入れて、聞こえてくる声を聞き始めよ。それがカガド・デュムの広間へ来る手掛かりとなるやも知れぬ。わたしが時々にその空間を訪れたのは、『デュリンの神』が到来する以前のことなのだ。

「従軍が肝要だ。敵をつくるな。その間のことは、★彼女★がやってくれている。身をそばたて、間近に迫るまでそれに手を出すな。刃を使うと3人の乗る手ごもる性質を引きつけるかもしれない。かすはらに会うのは何としても避けるように。」——わたしは、そなたらの現状までの報告に満足している。オルテナドには、つまらんことでわたしを悩ましてくれるなど伝えておけ。なにしろ遠慮会話はわたしにとって、計画部隊から見たらほとんど取るに足らぬ。ささやかな楽しみに過ぎるのだから。……」

影は白い手の紋で触られていた。

そのエルブは辛そうに身を屈こして話し始めた。

「わたしは数週間前に、光輝く氷が木の穴に閉じ込められている予感を感じてきました。あたり一面水でちかけていた。その時は明らかに知らず知らずで、わたしの助けを必要としていました。」

かすはらめき声を上げてから、また続けた。「その氷が溶融と聞いたので、わたしはガラドリエル様に助えを求めました。ガラドリエル様はわたしを導くところへ連れていき、二人で東部の東部にある秘密の通路を見ました。氷でできた大きな怪物が、氷で見た氷に閉じ込められている影と一緒に見えしました。氷の怪物はその胸から力を抜いて、その力を山脈のその威力を恐るすに堪えているように見えた。

「わたしはさすがに、この怪物と戦う使命を降りたいとガラドリエル様にお願ひしましたが、ロリエンのエルブはその怪物に勝てないよう定められているとおっしゃって、拒絶されました。それからもうその影を見ることはありませんでしたが、危れることはできませんでした。それで、たったひとりで近角に向かいました。ところがそこでオーク鬼どもに攻撃されて命を奪ひ、ロリエンに助けてきたのです。

「霧ふり山脈のオーク鬼たちが東部口を封鎖すれば、霧谷谷とロリエンは危機にさらされます。カラスラスの神——ガラドリエル様が怪物のことをぞろぞろはれたためです——この神の力が無大すると、われわれ全員にモルゴスの寒気がもたらされてしまうのです。カラスラスの神を倒さねば、東部口を開放しなければなりません。」

きみたちの知っている納かりはほんやりほの暖かいのに、きらめく星の無数の小面に反射して輝き、閃く。日光の中にあるような気がした。ミズリルだ。——はるか昔、モリアのドワーフたちがこの高嶺な山脈をすめてここを築いた。そして、ここがわれらはデュリンの神をも甘やかさせてしまったのだ。

オインの怪しげな声が聞いた。「ドウィリのケルンから、西、北、東、北、南、北」

「その他」と記された扉門にある「素朴なホビットの生活」という言葉の末に、次のような記述があった。あの美しい風景、あの静寂な山脈の麓にある異界ガリには、かつてのアモン・スールの歴史がある。魔王の軍勢に破壊された古代の都市だ。噂によると、都市の下には地下室と洞窟があったが、アングマールの魔王に封印されてしまったらしい封印に解ったのと同じ呪文を再び用いる以前に、これを解く方法はないという。異界ガリの麓の洞窟に通じる入口が他にもあると噂されているが、洞窟に仕込む者でさえ、誰一人としてそれを見つけてはいない。異界ガリの目撃者として有名なのが異界の王である。はるか昔の戦争で魔王に殺された者たちを甦える手段として、魔王の王から生き残った者たちが罰を受けたとされている。異界の王は、無慈悲なホビット・マルベスの手首で縛られている。

イメルデュアが囁く話を聞かされたとき、
その受け入れし所無きは罪を犯し、
異界の王が罰を受けるだろう。
折れたる杖を再び持つために、
打ち砕かれた心は癒えぬされ、
デューネダインの望みとなる
罰を受ける王を再び罰し、
呪いは再び告げられるだろう

細部にまで記されたなぐり書きで、マルベスの手首によくあることだが、言葉の意味を完全に理解できる者はいない。と書かれていた。

二人のトワープの騎士の服がそこを照らしている。口を開けるかのように見えるが、そしたら、きみたちは何と答えるだろう? にもがかわらず、きみは心の奥底に動揺を感じた。これら精巧に作られた壁画には、数なる数多以上の洞窟がある。それは、戦士たちの武勇に敬意を払っているホビットのしみに何か隠れているのだろうか?

灰色の霧が山を包んだ。きみは一瞬、面を隠したような気がした。それはガンダルフのようでもあり、ガンダルフよりも美しい顔のようでもあった。霧がほほえみで始まった。

まだエルフを見つけておらぬなら、先に異界の王政へ通じる道で戻れ。そしてエルベレスのことを話せよ。なぜなら、エルベレスという名には、あなたたちを助ける力があるのじゃ。ルーシエンという洞窟にも力があるが、エルフたちからルーシエンについて学ぶことはできない。

「古語の語のりは奥深い。世間で使われるが、そこなら彼が導いてくれるだろう。洞窟の主人を助け、探し出たとき、助けられてくれるがよい。」

「ガンダルフ?」「ガンダルフ?」と叫んで、その鳥は飛んでいった。

うつろな鳥が帰って来た時、まわりの空気が霧に包まれたような気がした。「何人かの美しい影が霧の中からよろよろと出てきて、空気の温度がどんどん下がっていった。霧のなかに虹の光のように輝いている。静寂に包まれていくような気がした。霧と静寂と遠くをささやいた。」

「アセルウォン?」ときみは叫び、洞窟が揺らぎようにこたえました。だがそれは無意味だった。夜女は死んだ。「夜女の犠牲を犠牲にするものが。」きみは涙をこらえながらいった。

怪物の目は100年前のもの、灰のように乾いていた。「ドル・ブルデュアの歴史は、最も深いからって、ホビットの歴史まで、10層になっている。歴史の中心にはオークや魔物の歴史がいくつとくさん入っているが、中でも一番恐ろしいのは死んだ古い歴史だ。これが再び新たな命を授けられたモルドールのサウロンであることはまちがいない。わたしは、白の会議に参戦するようにきりに動いている。この事実を知れば、サルーマン・モッシュは態度を変えることだろう。」怪物には、「死」という言葉があった。ガンダルフのしるしに似ていない。

一人立っている人物が、古代デッリシー族の王、ザローインだ。彼はドワーフの族王たちで、おそろしくロータ族であろうが、顔に見覚えがない。きみは心の奥底に動揺を感じた。こんな精巧な作り物の彫像には、思い出すべき以上の魂がある。それは、戦士たちの武勇に敬意を払っているホビットのしみに何か隠れているのだろうか?

灰色の霧が解れて風景がはっきりした時、きみたちは所在のある洞窟の奥にいた。どうやってここに来たのかよくわからない。そればかりが、元いたところへ戻る道もよくわからないうちに、暗い洞窟があらこちから手招きしている。

オインが怪しげな声で囁いた。「フリーのケルンから。西、南、東、南、東、北、西」

洞窟の上を駆け上ったこの地下室の奥に、ほこりの積もった空っぽの石庫がある。土庫の奥の奥から、この舞台がデューネダインの王子ベリサーールのためにしつらえられたということがわかる。

204.

足を取入れたとたん、壁の上の文字が光を放ち始め、ついに、はっきりと読めるようになった。無事は明らかにガンダルフ本人のものだ。「これを見つけてくれることを願っている。わしは目下、悪者どもによって地下に閉じ込められたところだ。わしの呪文がやつらを助けておくだろうが、それもあらかたぬだろう。ここでぐすぐすするな。やつらは暗闇が何より好きなのだ。エルベ！ その名を叫ぶな。なぜなら、この名にはやつらにまさる力があるからだ。そしてもう一つ、ささやかな援助として新しい名を授けよう。」ルーシエンは、床の上で脚けを呼び出す。この言葉を聞く限り、やつらがやって来た、わしはもっと深いところへ逃げねばならぬ。再びアルダの光を見るのは、その後だ。——ガンダルフより。」

205.

その夜更けは所からアイテムを盗み取った「はは？」かれは笑いながらぐるぐるまわって言った。「お前がやったものを、わしの剣のノブに替えてくられ。お前の剣の切っ先はノブの思いつきでたまたまにちげえぬも、ほれ、お前はこれを受け。」

206.

きみの一行の中には、かなりショックを受けた者もいた。かれらは運命に、神のまにけられたながら、ミズリル藍目の魔術を見つめている。他のどのなんものも、この巨大で膨張すべき場所では取るに足らないもののように見える。

207.

誰かがランキを盗み取ると、壁面に深く刻まれたルーン文字を読み取ることで、また、魔術的な文字で床のように書かれていた。「7つのしるしを用いれば、デュリンの扉を開け得るだろう。」

208.

深い洞に潜んでいる鳥さんたちの叫び、デュリンの世を魔術に導いた「デュリンの呪い」だ。この生きた叫びがドワーフをモリアから引き出し、以来、モドワープの記憶に染み渡すまで続いたのだ。きみたちの運命は定められた。

209.

深い洞の奥、中央には深い柱が洞に並んでそそり立っていた。それらの柱は、大蛇の卵に似せて彫られており、その彫り出した大蛇は、目の透かし魔術を彫造って、天井を覆っていた。大蛇の巨大な柱の根元に近く、大きな彫り目が口を開いていた。そこから、暗い魔術が、洞窟の中へぼろぼろと静かに立ち上っていた。

210.

この巨大な開口には、巨鳥の卵に似せて作られた扉があって、扉のそばにはエルブス語で「フィナルフィン」と書いてある。

211.

結局、ぼろぼろに彫けた扉が見つかっただけだった。壁面には二つの言葉が刻まれていた。「デュリンの呪い」と、その深い音に手を触れたとたん、音が叫びに変わっていった。

212.

ビレボははっとして椅子から立ち上がった。「どうしても書いておかなければならないことがあった。さすきにはいいんだけど。」

213.

ハルディアは目撃しをはじめた。「あなた方は、わが古いと道の中を、ケリン・アムロスにおいでになった。ここには色づきることのない、神の聖地に参る者の花々が咲き続けています。黄色いのはエラ・ミール、色の悪いのはニブ・レディル。カラドリエルのところへ参りましょう。」

214.

壁面が壊れて、石の破片が四方にちりちり散り、奥の通路に通じる小さな入口が露れた。大きな音が一つ響き、穴のようなメッセージが刻まれていた。ドワーフの足跡の数を数えよ。

215.

きみたちの間を音がホールに響きわたった。ついに、最後の洞窟。一帯で、ガレキの山のてっぺんに大蛇でもとどろくような大きな穴が開いた。

216.

トム・ボン・バディルはもうこれ以上いく気がなかった。洞窟に潜いたらバーリ・ナン・バタバーという手先の怪人、あるいは魔術という古い魔術を使うように、そうトムは教えてくれた。そして、ここからはきみたちだけで行くようにといった。「ここから行かないでください。だいたい魔術するんじゃない。魔術ならをまわす。幸運に出くわすように手を触れなさい。」

きみたちはトムに、始めてその洞窟まで向進して、もう一歩一緒に魔術に参りたいと頼んだが、かれは黙って断り、こういった。

「トムの洞窟は、ここでおしまい。
トムは、魔術をこえていかな。
トムには、手先の怪がある。
ゴールドバディルが持っている。」

それからトムはみんなに手を向け、椅子をぼんと振り上げて、笑いながら洞窟の中に入っていった。

217.

洞窟の奥は、大なる魔術の音で知られていた。のちに、魔サウロンがその洞窟の南側にドル・グルデ・アの大きな塔を建て、洞窟にそこを隠れさせていったため、魔術的な生物の呪い魔術として知られるようになった。かれの魔術はサウロンの魔術に染められているため、かれがいない時であっても、通らわれている者たちはかれの存在に苦しめられるようになっている。

深く魔術、穴のような穴の静けがあった。

この洞窟の生き物だけが、魔術の入口を通過してドル・グルデ・アに入り、出ていったといわれている。一人は、灰色のガンダルフで知られる魔術使いで、もう一人は、今やゴクリという名で知られるスメアゴルである。

227.

228

229

230

231

232.

238

234

285

2315

287

238

拾輪物語

第一卷 旅の仲間



株式会社 スタークラフト
〒355 埼玉県比企郡滑川町羽尾359
森林公園駅前 Tel. 0493-56-9988

Interplay

© 1990 INTERPLAY PRODUCTIONS, INC. PUBLISHED UNDER LICENSE FROM INTERPLAY PRODUCTIONS, INC.
INTERPLAY PRODUCTIONS IS A REGISTERED TRADEMARK OF INTERPLAY PRODUCTIONS, INC.
THE PROGRAM IS PUBLISHED WITH THE COOPERATION OF THE TOLKEN ESTATE AND THEIR PUBLISHERS, GEORGE ALLEN & UNWIN (PUBLISHERS) LTD.
THE PLOT OF FELLOWSHIP OF THE RING™, THE CHARACTERS OF THE HOBBITS, AND THE OTHER CHARACTERS FROM THE LORD OF THE RINGS
ARE A COPYRIGHT © GEORGE ALLEN & UNWIN (PUBLISHERS) LTD.
1966, 1974, 1979, 1981. ALL RIGHTS RESERVED. LICENSED IN CONJUNCTION WITH JPL.